

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** だけで、5 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は 45 分で、終わりは午前九時四十五分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 解答はすべて解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 解答を直すときは、きれいに消してから、新しい解答を書きなさい。
- 6 受験番号を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立小石川中等教育学校

1 文章1は藤沢周平の「変貌する村」という文章です。

文章2は、日高敏隆の「里山物語」という文章です。

二つの文章を読み、後の問題に答えなさい。

文章1

私^{わたし}が生まれた村は、以前は静かな村だった。初夏には裏の丘で^①閑古鳥が鳴き、雨期には姿の見えないアカシヨウビンが鳴いた。また、いまはなくなったが以前は川のそばに葦^{あし}がしげる湿地^{しつち}があり、夏になるとそこで^③行行子が鳴き、巢^すをつくり卵^{たまご}を生んだ。

冬になると、雪はたったひと晩でおどろくほど厚く村の上に降りつもる。そういう日の朝は、まだ布団にもぐっている子供たちの耳に、村のあちこちで打つ藁^{わら}打ちの音が聞こえてくる。一定のリズムでカーン、カーンとひびく澄んだ打撃音は、その日の藁仕事のために使う藁をやわらかくする音である。

私が子供だったころは、どこの家にも稲^{いね}から玄米^{げんまい}を精製する作業のためのコンクリートか粘土^{ねんど}質の土で固めた作業場があって、藁を打つときに使う大きくて^④扁平な石がその中に埋めこまれていた。私も成年近くなったころにこの藁打ちをやったことがあるけれども、藁打ちの杵^{きね}は大きくて重い。足先で藁束をまんべんなくころがしながら打ちつづけなければならぬのだが、この藁束も

かなり大きいので、束ひとつを打ち終わるころには、身体は汗ばむほど熱くなるものだった。

そして鶏^{にわとり}の声、犬の声。鶏の声も犬の声も聞けば大体あれはどそこその家の犬とか鶏とかがわかった。また牛も馬も村の一員だったが馬がほとんど声を出さないのにくらべて、牛は無遠慮^{ぶえんりょ}に鳴いた。冬といえは、藁打ちの音のほかに思い出すのが村の青年たちが習う^⑤謡^{うた}の聲、菩提寺^{ぼだいじ}の若い僧^{そう}たちの^⑥寒行^{かんぎょう}の聲などである。静かな村で聞こえてくるのはそんなものだったろう。静かだったからよく聞こえる音だったとも言える。そして馬車の重い車輪の音、荷車の音。

だがその大部分は、いまは消えてしまった音である。閑古鳥やアカシヨウビンはいまも裏の丘の雑木林^{ざつぼくばやし}で鳴くだろうけれども、葦原を失った行行子が、コンクリート護岸の川べりにくるとは思えない。ちなみに言えば、葦原がなくなったのは、村の家家が茅葺^{かやぶき}きから瓦葺^{かわら}きき一色^{いしき}に変わって葦の需要^{じゅよう}がなくなったからである。

牛も馬もいなくなり、冬の間の藁仕事もなくなった。それで稲は刈り取られるとその場で^⑦籾^{もみ}にされ、藁は細分されて田圃^{たんぼ}の中で燃やされる。物の運搬^{うんぱん}に必要だった馬車や荷車は消えて、軽トラやトラックが農道まで入りこみ、田圃の農作業のほとんどはトラクターやコンバインなどの機械がやるようになった。

私のようにむかしを知る者にとってはすべて目をみ

はるような変化だが、しかしそれはたまに外から帰るか
らそう感じるので、私が村をはなれてから四十年たつと
いう年月の経過を考えれば、村の人びとにとってはむし
ろ遅遅とした変化だったかも知れない。そしてこういう
変化は、中身こそ違え、私が生まれる前にもあったはず
である。

○ことばの説明

- ① 閑古鳥——カッコウ。
- ② アカシヨウビシ——鳥の一種。
- ③ 行行子——鳥の一種。
- ④ 扁平な石——平たい石。
- ⑤ 謡——ことばにふしをつけてうたうこ
と。
- ⑥ 菩提寺——先祖時代の位はいをおさめてあ
る寺。
- ⑦ 寒行——寒さをがまんして行う修行。
- ⑧ 遅遅とした——おそいようす。

文章2

つい何日か前、NHKで里山の番組を見た。人が自然と共に生きている琵琶湖西岸の美しい映像であった。ぼくは自然の中に吸い込まれていくような気持ちでじっと見入っていた。

そのうちにぼくはふと気づいた。自然の中に吸い込まれるというこの表現は、里山については適切なものではないのではないかとということに。

なぜならいつも言われているとおり、「里山」はけっして「自然」ではないからである。

もともとの自然の中に人間が入っていき、木を伐ったり、草を刈ったり、いろいろな働きかけをしていることによって生まれたもの、それが里山である。

もともとの自然は深くこんもりした林であったろう。そこはあまり日もささず、うす暗くひんやりしていて、あまり快適な場所ではなかったにちがいない。少なくともそこに腰をおろし、のんびり弁当でも開いてくつろぐという気になる場所ではなかったろう。

しかし人が入っていった薪にする木を採り、小屋を建てる材木を伐り出し、あるいは林の緑を切り開いて小さな畑を作ったりというようなことをしていくと、林は少し明るくなり、やがて明るい場所を好む草や灌木も生えてくる。

その草木に花が咲けば蝶もやってくるし、花蜂たちも訪れる。草木にはいろいろな虫がついて葉を食べる。そしてそのような虫たちを求めて小鳥たちも姿を見せる。きつとこんなふうにして林は少しずつ変わっていったのだらう。

そこにはいわゆるエコトーン、すなわち自然の傾斜ができてくる。深い林から少し開けた明るい林、そして草地、畑、人家という傾斜が。

これが「里山」なのだとはぼくは思っている。つまり里山は「里山」という「山」ではなく、人と自然が交錯するところ、基本的には人里なのである。

そこでは人と自然が共に生きていくのではない。人は自然の中に入っていったって、自然に何らかの働きかけをする。そこをただ歩くだけでも、それは働きかけである。人は地面に生えた草を踏み、何匹かの虫を払い落としたり踏みつぶしたりする。木も伐るであろうし、草も刈る。しかし自然も負けていない。伐られた木は元の状態に戻ろうとして若枝を伸ばし、草はまた生えてくる。虫たちもせっせと子孫を残す。こうして人と自然のせめぎあいが続いていく。これが里山であり、人里である。

こうして生まれた里山は、もともとの深く暗い林とちがって、人間が親しみと安らぎをおぼえる場所になる。それが近年の里山賛美の源であることは疑いない。けれど里山を賛美するあまり、奇妙なこともおこって

いる。たとえば里山への人の立ち入りを禁止したり規制したりというのもその一つだ。

人が入って働きかけることを止めれば、里山の自然はたちまちにして元へ戻っていく。それは人間の入って行くにくい、少なくともあまり快適ではない場所になってしまいい、たちまちにして里山の「荒廃」がおこる。今や各地で、里山の荒廃が問題とされるに至っている。

その一方、里山の美への憧れはますます高まっている。里山の美しい映像は人々の心を打ってやまない。どうやら人々は、そこに自然の美を求めているように思える。今や、人工の美ではなく自然の美を求める気持ちになってきたのだろうか？ もしそうであるのなら、それは喜ばしいことであろう。

でも果たしてこれで十分なのだろうか、ぼくはときどき考える。

少し前に述べたとおり、里山はけっして自然そのものではない。それは自然と人間のせめぎあいの産物なのである。もしこのことを忘れると、人間は徹底した自然と徹底した人工とを求めることになりはしないだろうか？ それは何か非現実的で不自然なことになってしまふような気がしてくる。

地球上で徹底した自然というのは、地震とか噴火とか暴風、大雨などのように、人間にとって恐ろしいものであることが多い。人間はそれを求めてはいないし、美し

いものとも思っていない。

一方、人間は人工物を徹底的に発達させ、その利便さを享受している。

それはそれでよいのだし、それが人間の偉大さでもあるのだが、人々はその間に一抹の不安をも感じている。その反動が自然礼賛の気持ちの源であることも否めない。どうやら人間は、何か両極端の間をさま迷っているのではないだろうか？

そんなふうに思ってみると、里山というのは意味深いものである。それは繰り返して言うとおおり、里山が自然と人間のせめぎあいの産物だからである。

○ことばの説明

- | | |
|------|-------------|
| ① 灌木 | 背の低い木。 |
| ② 交錯 | 入りまじること。 |
| ③ 荒廃 | 荒れ果てること。 |
| ④ 享受 | 受け入れて楽しむこと。 |
| ⑤ 一抔 | 多少。 |
| ⑥ 礼賛 | ほめたたえること。 |

〔問題1〕

文章1と文章2の筆者の考えをそれぞれ文章にまとめて、四十字以上、五十字以内で書きなさい。『や』もそれぞれ字数に数えます。

〔問題2〕

〔問題1〕でまとめた、文章1と文章2の筆者の考えをふまえて、それぞれについて、あなた自身が見聞きしたことや体験したことの例をあげながら、自然と人間とのかかわりに対するあなたの考えを書きなさい。なお、内容のまとまりやつながりを考えて段落に分け、四百六十字以上、五百字以内で書きなさい。また、次の「きまり」に従いなさい。

〔きまり〕

- 最初の行から書き始めます。
- 題名は書きません。
- 各段落の最初の字は一字下げて書きます。
- 『や』もそれぞれ字数に数えます。
- 段落をかえたときの残りのます目は、字数として数えます。
- 最後の段落の残りのます目は、字数として数えませんが、